



**さらしなさんたちの女子会
第一章**

株式会社シメケン

さらしなさんたちの女子会
第一章

株式会社シメケン

「さらしなさん、お待たせしました！」駅の改札口で、敬語で話す少しポンコツなアンドロイドのアルファさんが、平安時代の有名な作家であるさらしなさんに声をかけた。さらしなさんは、紫色の着物に白い帯を結び、髪には花飾りをつけていた。彼女は、現代の文化に興味があり、時々タイムスリップしては色々な体験をしている。

「あら、アルファさん。こんにちは。今日はどういう格好をしているの？」さらしなさんは、アルファさんの姿に目を丸くした。アルファさんは、白いワンピースにピンクのカーディガンを羽織り、頭にはリボンのついたヘッドバンドをしていた。彼女は、自分の服装や髪型を自在に変えることができる。

「ええと、これはスイーツバイキングに行くときに着るものだと思います。可愛いでしょう？」アルファさんは、自信満々に微笑んだ。

「可愛いというか、目立つというか……」さらしなさんは、苦笑いしながら言った。

「あつ、シメ犬さんとアマビエさんも来ましたね！」アルファさんは、改札口から出てきた

二人を指さした。シメ犬さんは、かわいい犬の女の子で、茶色のフリースに黒いスカートを着ていた。彼女は、人間と犬の両方の言葉を話すことができる。アマビエさんは、妖怪だ。どこか神々しく恭しい女性で、青い鱗に覆われた身体と長い髪を持っていた。彼女は、海から上がってきて人間と交流することが好きだった。

「こんにちは！今日は楽しみですね！」シメ犬さんは、尻尾を振りながら言った。

「皆様、ご機嫌よろしゅうございますか？」アマビエさんは、礼儀正しく頭を下げた。

「こんにちは。シメ犬さん、アマビエさん。今日はよろしく願いします」さらしなさんは、二人に挨拶した。

「では、行きましようか。電車に乗って東京に向かいますよ」アルファさんは、三人を引っ張ってホームに向かった。

「電車？東京？それって何？」さらしなさんは、不安そうに聞いた。

「電車というのは、鉄でできた馬車みたいなもので、すごく速く走ります。東京というのは、日本で一番大きな都市で、すごく賑やかです」アルファさんは、説明した。

「へえ……そうなんだ……」さらしなさんは、興味深そうに言った。

「わんわん！私も電車に乗ったことがないから、楽しみだわん！」シメ犬さんは、はしゃいだ。

「私も東京に行ったことがありません。どんなところでしょうか」アマビエさんは、期待に満ちた表情で言った。

「じゃあ、みんなで行きましょう！スイーツバイキングもすごく美味しいですよ！」アルファさんは、笑顔で言った。

「スイーツバイキング？それって何？」さらしなさんは、また聞いた。

「スイーツバイキングというのは、色々な種類のお菓子を食べ放題できるところです。ケーキやプリンやアイスクリームなどなど。甘いものが好きなら、天国みたいところです」アルファさんは、目を輝かせて言った。

「ほう……そうなんだ……」さらしなさんは、舌なめずりをした。

「わんわん！私も甘いものが大好きだわん！食べまくるわん！」シメ犬さんは、興奮した。「私も甘いものは好きですが、鱗に良くないと聞きました。少しでも食べます」アマビエさんは、控えめに言った。

「大丈夫ですよ。今日は特別な日ですから。思いっきり楽しみましょう！」アルファさんは、元気に言った。

「そうね。今日は特別な日よ。私たちの女子会だもの」さらしなさんは、笑って言った。

「わんわん！女子会だわん！」シメ犬さんは、鳴いた。

「女子会……素敵ですわね」アマビエさんは、幸せそうに言った。

四人は、仲良く手をつないで電車に乗り込んだ。窓から見える景色は、彼女たちにとって未知の世界だった。しかし、彼女たちはそれを恐れることなく、好奇心と楽しみで満ちていた。彼女たちは、異なる時代や種族や性格の者同士だったが、それを越えて友情を育んでいた。彼女たちは、今日一日を忘れられない思い出にするつもりだった。

あとがき

※ AI に書かせたフィクション作品のため実在の人物とは一切関係がありません。

さらしなさんたちの女子会 第一章

著者 株式会社シメケン
出版日 2024年01月27日
出版 シメケンユメノベル



Shimeken Yume Novel